

プラグマティズムから見た進化論と宗教の関係

A Pragmatic View on the Relationship between Evolution and Religion

林 研

Ken HAYASHI

大阪経済法科大学 21世紀社会総合研究センター 客員研究員

目次

- I. はじめに
- II. 進化論論争とその問題点
- III. プラグマティズムとその適用
- IV. 「設計」と「偶然」
- V. 宗教と進化論の積極的關係
- VI. おわりに

キーワード：ダーウィニズム・キリスト教・プラグマティズム・設計・偶然

I. はじめに

宗教と科学の関係については近年英米圏で研究が盛んになっており、その関係が多面的で複雑であることが明らかになっている。しかし、それにもかかわらず一般にはいまだ「対立」のイメージが強い。とりわけその印象を強くしている具体例のひとつがダーウィンの進化論とキリスト教との論争であろう。これは、特にアメリカ合衆国においては現代でも解消されていない問題であり、その考察が学的に有意義であるだけではなく、現実的な解決策が求められてもいる。すなわち、改めて何がどう問題になっているのかが整理され、調停を可能にする思想的枠組みが提示されるべきなのである。

そこで本稿では、この論争を概観して宗教側・科学側それぞれの問題点を提示した上で、解決法の候補としてプラグマティズムの哲学を取り上げる。プラグマティズムは現代において再評価が進む思想であると同時に、時代的にも理論的にも進化論との関係が深い。こうした点をふまえ、問題解決への糸口を探るのが本稿の目的である。

II. 進化論論争とその問題点

1. 論争の歴史

生物が進化するという考え自体はダーウィン以前にも存在した。しかしそれはひとつの世界観であり哲学であったため、重大な問題とはみなされなかった。それに対し、ダーウィンの『種の起源』(1859)は進化論を科学理論として確立させるものであり、その真理性を科学の名のもとにアピールした。特に自然選択の理論は神の働きに取って代わる説明でもあったため、ここから宗教との対立が始まったとすることができる。

19世紀の知識人の反応としては、ダーウィン理論とキリスト教との関係を対立的に捉える立場と、調和的に捉える立場とが併存していた。米国の例を見るなら、明確に対立関係を主張したのは、例えば神学者チャールズ・ホッジ (Charles Hodge, 1797-1878) であり、「自然におけるデザインの否定は事実上神の否定である。ダーウィンの理論は自然におけるすべてのデザインを否定する。したがって、彼の理論は事実上無神論的である」と断定している¹。

一方、植物学者エイサ・グレイ (Asa Gray, 1810-1888) らは有神論的進化論を唱えていた。グレイはダーウィンの理論を自然神学の枠組みの中で理解しようとし、個々の生物のデザインではなく、進化の過程そのものが創造主によるデザインだと考えた²。しかし、有神論的進化論の考え方は20世紀に入って失速する。米国においてはファンダメンタリストが台頭し、スコープス裁判³に見られるように、公教育の問題とも絡みながら進化論への賛否が対立していった。それは現代まで続くことになる。

その一方、20世紀には科学者や神学者の間で、キリスト教の教義と科学理論とを異なる知的領域として分離し、それらを互いに無関係と考える立場が主流になってくる。有名な主張として、進化生物学者スティーブン・ジェイ・グールド (Stephen Jay Gould, 1941-2002) のNOMA⁴があるが、カール・バルト (Karl Barth, 1886-1968) やルドルフ・ブルトマン (Rudolf Bultmann, 1884-1976) の神学⁵においても、事実問題を扱う科学と意味の問題を扱う宗教はそれぞれ独立しているという見方が示されており、事実上停戦が成り立ったとも言える。しかし、この停戦は最終解決にはならないという指摘は多い。この点についてはV章でもう一度触れる。

では次に、宗教側・科学側それぞれにおける問題点を素描してみよう。

2. 宗教側の問題

宗教は一般に、程度の差こそあれ正典に従うものであり、キリスト教は古代に書かれた聖書に則る。そのため必然的に、それを現代に適用することに起因する様々な問題が生じる。宗教における保守主義や復古主義は、その意図としては原点を大切にしている態度であ

て、そのこと自体間違っていない。しかし、文書を逐語的に読み遵守しようとする方法を取ると、問題が起こることになる。一方で、正典を現代的に解釈する試みはどの宗教でも試みられており、一定の成果を上げている。とはいえ、例えばキリスト教プロテスタントは統一解釈を掲げる仕組みを持たない。個々の教会がそれぞれ個々の立場を取ることによって、逐語的解釈を否定する合意ができない以上、創造の記述が進化論と衝突することは避けられないことになる。

また、リベラルな神学の立場から見ても、キリスト教にとって創造の教義は宗教的核心であり、それをどのように解釈するかということは大きな問題となる。創造は、実際には必ずしもその事実性が重要なわけではない。しかしそこに神の「目的」があり、世界が神に「設計」されているという思想はキリスト教の根幹であって、この点がダーウィンの進化論によって脅かされているところに問題が生じるのである。

自然選択のシステムによって、ランダム性を含みながら環境に応じて進化が起こるという説明は、単純に考えれば目的と設計の否定であり、それはキリスト教の世界観を無視することである。さらに言えば世界にとって神が不要であるという宣言にさえ聞こえる。不要であることは存在しないこととは異なるが、神が不要であれば当然信仰する意義が損なわれるだろう。

3. 科学側の問題

天動説と地動説の論争のように、宗教と科学が意見を異にしても、科学的事実の明白性が高ければいずれ意見は統一される。しかし進化論の場合、その特性上確かさの度合いが弱いという問題がある。まず、進化は一回性の歴史的事実であって再現性がないため、実験や観察による証明が不可能に近い。また、自然選択の理論は、事実の観察から帰納的に見出された理論ではなく、アブダクションの推論に依っている。

アブダクションは、観察された事実の集合からそれらの事実についての最も尤もらしい、あるいは最良の説明へと推論する方法であり、プラグマティズムの創始者パーズ (Charles Sanders Peirce, 1839-1914) が帰納、演繹に次ぐ第三の推論形式として提示したものである。ダーウィンの進化理論は、事実の集積からパターンを拾って帰納的に導かれたものとは言えず、生物の分布の事実を最もよく説明する仮説として見出されており、アブダクションの形式に該当すると判断される。

このアブダクションは本来的に決定力の弱い推論形式であり、論理によって異論を否定できないため、素朴な創造論もその可能性を損なわれない。もちろん現時点では、ゲノム分析と解剖学的研究、化石研究がよく合致しているため、進化論は科学的に合意が得られるレベルに達している。しかしそれは状況証拠のようなものであり、科学的説得力が弱いことは否めないのである。

もうひとつ、科学者の側に問題点がある。自然選択の理論が示すのは、神の介入が不要

だということにつけるが、進化論を信奉する者はえてして無神論を主張する。これは当然反発を強くする要因である。確かに、自然科学は基本的に方法論的自然主義を採用するのが普通である。つまり、観察できるもののみを材料にし、超自然的な影響の可能性を排除して理論を立てるわけである。これは仮説を構築する上で正当な方法ではあるが、その反面イデオロギー的な自然主義に移行しがちなところに問題がある。科学は本来、超自然的な領域を不問にするべきであり、これを完全否定することは越権行為になる。このことがしばしば宗教との対立につながっている。

Ⅲ. プラグマティズムとその適用

1. プラグマティズムとは

プラグマティズムは、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、米国で誕生した哲学である。当時活躍したパース、ジェイムズ（William James, 1842-1910）、デューイ（John Dewey, 1859-1952）の3人が「古典的プラグマティスト」として広く知られている。プラグマティズムの基本的な考え方は、観念は行動によってはじめて意味を持つということ、つまり、観念の意味は行動の効果として考えるべきだということである。このパースの基本コンセプトをジェイムズが拡大し、観念に基づいた行動が満足な結果をもたらすなら、それが真理ということだと主張した。デューイは観念が行動のための道具であるという理解を強調し、応用範囲を政治や教育の領域に広げた。

論者によってプラグマティズムの強調点は異なるものの、その一般的特徴としては、帰結主義、可謬主義、功利主義、全体論、多元論などが見られる。さらに主要な見解として、真理を普遍妥当なものではなく、暫定的で合意的なものとして捉える点が挙げられよう。

こうしたプラグマティズムの考え方は、20世紀前半にいったん存在感を失うが、20世紀半ばにウィラード・ヴァン・オーマン・クワイン（Willard van Orman Quine, 1908-2000）がその有効性を再発見し、さらにリチャード・ローティ（Richard Rorty, 1931-2007）やヒラリー・パトナム（Hilary Putnam, 1926-2016）が「ネオ・プラグマティズム」の潮流を生み出した。その後プラグマティズムは新しい着想を取り入れながら様々な方面に展開し、現代アメリカ哲学のひとつの中心軸を担うに至っている。プラグマティズムの現代性は、誰もが納得できる究極の真理が得られない多様性の世界のなかで、民主的で未来志向のヴィジョンを提示できるところにあると言えるだろう。

ところで、プラグマティズムはダーウィンの進化論の影響のもとに生まれたと言われており、その論理構造はダーウィンの理論とかなり一致している。プラグマティズムは1870年代に活動がなされた「形而上学クラブ」を出発点としているが、この集まりのメンバーは、パース、ジェイムズを含めて等しくダーウィンの理論をよく理解し、自身の思索の刺激としていた。

プラグマティズムの土台となる人間観は、環境との相互作用のなかで行動する存在というものであり、人間精神や認識、概念などは適応の結果だとみなされる⁶。また、人間は生物種と同じく集団として考えられるため、こうした知的作用は協同のための道具と捉えられることになる。そして、概念の真理性も一種の適応であり、それは選択を受けながら変化し続けるものとみなされる。つまり真理は生物種と同じように静的なものではなく、変化し続けることが常態であって、その変化は、その真理の運用が環境に適応する場合にのみ生き残っていくという仕方で行われるのである。

したがって、古典的プラグマティストは皆、原則としてダーウィン理論を認めている。それと同時に彼らは、それぞれ立場の違いはあるものの、宗教を肯定している⁷。つまりプラグマティストは、世界を進化論的に、また同時に宗教的に見ることができるのである。ここには、両者を理論的に架橋するヒントがあると思われる。

2. プラグマティズムから見た総論

ではまず、プラグマティズムの基本的思考法を用いて進化論問題を論評してみたい。古典的プラグマティストの宗教観に共通するのは、人間の本性に根差す「生きた宗教」の擁護であり、教条的なキリスト教への批判である。したがって、正典の再解釈を許すリベラルな態度は最低限必要ということになる。

パースのプラグマティズムは、1878年の論文「いかにしてわれわれの観念を明晰にするか」⁸で提示されたものであるが、これに先立つ論文「信念の固定化」⁹で、パースは「探求の方法」を分析している。ここで言う「探求」とは、いわば人が納得に至るプロセスのことであり、その信念を固める際の方法として、「固執の方法 (the method of tenacity)」「権威の方法 (the method of authority)」「先天的方法 (the a priori method)」「科学の方法 (the method of science)」が挙げられる¹⁰。パースはこの4者を特徴づけた上で、最も優れた方法として「科学の方法」を選ぶ。そして、哲学を科学的に行う方法としてプラグマティズムの格率を提示したのである。

こうした経緯から見てもわかる通り、プラグマティズムは「やってみてどうなるか」という実験的手法であって、基本的に科学の立場に立つ。したがって、宗教を評価する場合でも、伝統的な教説にただ従う「権威の方法」は棄却されるのである。

「科学の方法」は、既に持っている信念と観察された事実とが衝突する際、実験的に確かめていく態度であり、信念と事実の調停を行うことだとも言える。宗教的信念と進化論との衝突は、端的に言えば進化の事実をどう解釈するかが問われている場面である。もしこの調停を「科学の方法」で行うとするなら、神学的な進化解釈を仮説として新たに形成し、それを実験的に試してみる、ということになるだろう。

ダーウィンの進化論がアブダクションの推論によって見出されたと判断できることは先に見たとおりである。アブダクションはそもそも、「科学の方法」の第一段階とされる仮

説形成のための推論であるから、進化論を経た新しい神学的解釈もまた、アブダクションの推論から考え出されていくことができるはずである。進化論が様々な検証にさらされることになったように、宗教的な進化論解釈もアブダクティブな仮説形成、そして検証というプロセスをたどるべきではないだろうか。

例えばジェームズは次のように言う。

信仰は作業仮説と同義である。ただひとつの相違は、ある仮説が5分間で論駁されるのに対して、他の仮説は長い年月にわたって抵抗するということである……ダーウィンの学説や物質の運動構造説のような理論は、その確証において幾世代もの労力がかたむけられるであろう。その際、その真偽をテストする個々人は、次のような単純なやり方で進める——すなわち、彼はあたかもそれが真であるかのように行動し、仮定が誤りであればその結果は彼を失望させると予期するのである。失望が遅くなれば遅くなるほど、それだけその理論に対する個々人の信仰は強くなっていく¹¹。

このような人間基準で宗教的真理が決められるのか、と問われるかもしれない。しかしプラグマティズムの観点からすれば、もし神が存在するならば、それは人間の信念や行動と整合性のある性質を持つはずなのであって、この発想は必ずしも不遜ではないだろう。こうした観点は何らかの形で神学に持ち込むことも可能ではないだろうか。

また、プラグマティズムは科学的実験の方法論を信奉するため、「科学」の理解も、あくまで方法論としてのものになる。したがって、科学者が宗教的なものを全面的に否定する越権行為は、パースの信念形成論からすれば「科学の方法」ではなくむしろ「固執の方法」と捉えられよう。

ところでジェームズは科学理論に関しても、これを自然の写像ではなく、事象を記述する道具とみなす考えに賛同する。つまり科学理論もプラグマティックな意味で真理なのであって、ダーウィンの理論もそこに含まれる。したがって宗教の仮説も、進化論と調和しうまく運用されるならば、それは権利上、科学理論の真理性に劣ることなく同等のレベルで真理の名に値すると言える。

次に、より個別の問題点について、ジェームズとパースを引きつつ考察を行う。

IV. 「設計」と「偶然」

1. ジェームズと「設計」

進化論を認める上でキリスト教にとって大きな問題となるのが、設計あるいは目的の教義であった。そもそも神の設計や目的は、経験的方法では見出せない。従来の自然神学においては、生物が自然にうまく適応しているという事実が神の設計の証明とされてきたの

だが、ダーウィンの理論を認めるならば、この証明は無効化されてしまう。ここが問題となるわけである。こうした状況において、ジェイムズはプラグマティズムの方法を用いて「設計」概念の分析を行っている。

ダーウィンの進化論と設計の教義が両立すると想定した場合、設計はシンプルな個別創造とは異なる、奥深く理解の困難な働きと解さなければならなくなる。この場合、「設計」という言葉だけでは何ら意味を持たず、「設計」がどのようなもので、世界は何であるかということが重要な論点となるだろう。つまり、「設計」の有無よりも、その中身が問われる状況に変わったのである¹²。

では、プラグマティックには「設計」はどう考えるべきか。ジェイムズは次のように言う。

「設計」は、私たちの賞賛の対象として事物の上や背後に据えられた単なる合理的原理であるなら価値がないけれども、もし私たちの信仰がこれを何か神的なものとして具体化するならば、将来を約束する言葉となる……事物を働かせるものが盲目的な力ではなく予見的な力であるならば、私たちは当然より良い結果を期待するだろう。この漠然とした将来についての信頼だけが、「設計」や「設計者」という言葉に現在認められるプラグマティックな意味なのである¹³。

つまり、設計概念の効果は未来への信頼と安心感を得ることだというわけである。ジェイムズはしばしば唯物論と有神論のプラグマティックな相違を心理的效果の面から語るが、設計もまさに心理的な活力を与えるものとして捉えられている。プラグマティズムの機能主義的な視点から見れば、神に求められるのは、過去の創造よりも未来の救済なのである。

こうした理解では、設計の事実性や真理性は過去を見て確認されるものではなく、未来に進みながら確認されることになる。プラグマティズムの立場から言えば、設計を論理的に位置づけて論証できなくとも、設計を信じて日々生活することが検証であり、世界がうまく機能すること、より善くなることが証明となる。つまり、現時点で神の設計や目的を証明できなくとも、科学的方法論を用いながら宗教的信念を維持することは可能となるのである。

2. パースと「偶然」

ダーウィン進化論と設計の問題に関して、もうひとつしばしば指摘されるのが、「偶然」の問題である。自然選択の理論では、偶然の変異が進化のきっかけとなる。しかしこのことについて、全能の神による設計に偶然が関与することは認め難いとして、宗教側からの反発が多く見られたのである。

さて、パースは形而上学クラブのメンバーとしてダーウィンの理論に影響を受けていたが、その評価は必ずしも肯定的ではなかった。その理由は、ダーウィンの理論が証明困難であるということ、そしてその理論が経済優先の「貪欲の哲学」にフィットしてしまうことであった¹⁴。しかし一方で、パースはダーウィンの説を徹底的に検討し、偶然というコンセプトを自身の進化哲学に取り入れている。

パースは独自の思弁的な宇宙進化論を構想していた。それは、偶然的変異による進化、機械的必然性による進化、創造愛による進化という三つの様式の総合であり、対立する偶然と必然を創造愛が包含し克服するというヴィジョンである¹⁵。

このうち、偶然という観念は、パースにとって欠かせないピースであった。パースは規則性には常に逸脱が存在するとし、むしろ偶然の作用から秩序が生まれると考えた。偶然をベースに置いてこそ、宇宙の複雑さや多様性が説明可能になるという理解である。ダーウィンの進化論はこのことを支持する理論として取り入れられることになる。

そしてパースは、偶然性が神の存在をむしろ擁護すると考えた。なぜなら、必然性だけで成り立つ決定論は人間を機械とみなすことであり、神が人間に対して愛を持つならば、人間の人格、自由と成長を保証するために偶然性を導入するはずだからである。

もしある人の最期があらかじめ明らかであれば、発達・成長・生活の余地は存在せず、その結果人格も存在しないだろう。事前に決定された単なる実現は機械的である……真の進化哲学、すなわち成長の原理を宇宙の根本要素とする哲学は、人格的創造主の観念に敵対するものどころか、本当はその観念と不可分なのである¹⁶。

つまり、成長の原理は必然からは出て来ず、この原理の存在は神の愛を暗示するというわけである。偶然という、神学にとって一見ネガティブな要素を、積極的に神の賛美に用いるという逆転的な理論展開がここで可能になっている。

V. 宗教と進化論の積極的關係

さて、20世紀以降、知識人の中で宗教と科学の領域を分離するという休戦状態が一般化していることは先に述べた。しかし、これには問題もある。この分離は、言い換えれば事実と価値の分離ということになる。しかしそもそも事実の裏付けのない価値は尊ばれるであろうか。価値のない事実が関心を持たれるであろうか。両者を分けて整理することは知的には有用かつ必要であるが、現実の生活のなかでは分離されていないのが普通なのである。

また、現象世界の事実と無関係な神が存在したとして、その神は信仰するに値するだろうか。宗教の持つもっとも重要な機能は救済である。神が人間の苦悩に対して介入することを期待できないなら、宗教は何のためにあるのだろうか。宗教と科学の分離は、結局

のところ宗教をまったく空虚なものにするリスクを持つのである。普通の信仰者にとって、この分離を徹底することは極めて困難と思われる。

では、プラグマティズムの観点から両者のより積極的な関係は考えうるであろうか。ここまで見てきたジェイムズとパースの見解にそのヒントがある。設計や偶然についての解釈に共通して見られるのは、人間の自由の意義であり、自由意志を中心に据えて宗教を解釈する視点である。

ダーウィンの進化論は一見宗教に敵対的に見えるが、一方で偶然性を含むことによって機械論的決定論にも反対する。ジェイムズは人間の自由意志のことを、「プラグマティックには世界における新しさ (novelties) を意味する」¹⁷と言う。そして新しさは多くの人に要求されているものである。なぜなら、われわれの生きる世界の現実には悪が存在していて、われわれはそれを改善したいからである。

すでに完璧な世界においては、「自由」は悪くなる自由しか意味することができない……人が合理的に要求しうるのは、もちろん、物事がより善くなるだろうという可能性だけである……自由意志はかくして、救いの説である以外にはなんの意味ももたない¹⁸。

つまり、自由意志という観念は、物事がそのままであるのではなく、より善くなる可能性の希求だと言いうるのである。

したがって、決定論の否定、自由意志の有効性は物事が善くなる可能性を保証する¹⁹。ダーウィンの進化論がもたらすこの帰結は、一種の宗教的な救済と見ることもできるのである。

自由意志はこうして、ちょうど絶対者、神、霊、設計などと同じように、普遍宇宙的な約束の理論である²⁰。

神の愛をベースに考えるならば、偶然の関与と自由意志の導入は妥当な設計であり、進化の原理は宗教と調和する。そしてそのことは人間のこれからの行動によって検証できるというのがプラグマティズムからのひとつの応答とすることができるだろう。

では最後に、こうした哲学的見地から提案された宗教観がキリスト教にとって受容可能なかどうかを検討しておく。

人間が自由な意志によって行動することは神の全能性という観念と緊張関係にあるため、自由意志の問題はキリスト教神学において長らく議論されてきているが、ここにもやはり悪の問題が関わっている。人間が悪を為すという現実を見るなら、その根拠を善なる神に求めることはできず、悪の責任主体として人間の自由意志が不可欠となる。こうした見解は古代より教義として通用している²¹。これはまた、神が人間に理性と意志を持たせ

たという一般的な理解とも合致する。神が愛ゆえに人間に自由を与えたとする見方は、パースの偶然についての見解とパラレルな構図とも言えよう。ただし、神学において救済は神の業であり、人間の意志によって最終的な救済に到達することは明確に否定される。したがって残る問題は、自由意志が悪を為すだけなのか、何らかの積極的な意義をもつのかということになる²²。

ここで、創造論における「継続的創造」という概念が手掛かりになると思われる。神の創造行為は、かつて一度行われたというだけではなく、世界の存立を支え続けることとも考えられ、神学上こちらを重視する立場もある。ここで具体的に仕事をするのが人間であり、人間は意志によって神の創造行為に参加すると考えられるのである²³。

さらにまた別の角度から見てみると、このことは終末論における「後千年王国説」とも呼応する。千年王国説には、キリストが再臨して千年王国を築くという前千年王国説と、教会と人間の努力によって千年王国が築かれ、その後にキリストが再臨するという後千年王国説とがある。米国においては、信仰復興運動を主導したジョナサン・エドワーズ (Jonathan Edwards, 1703-1758) 以来、後千年王国説が大きな影響力を持ってきた²⁴。後千年王国説においては、歴史が断絶することなく漸進的な発展が見込まれるため、この思想はその性質上、進化というヴィジョンと相性が良い。

このような千年王国の思想は、ダーウィンのような進化を認めたとしても、神の「設計」を矛盾なく信じる手助けになるかもしれない。終末論は神の目的にかなうものとして歴史を見るが、それは厳密な決定論を意味するものではなく、最終的な到達点を指示するものである。例えばカトリック²⁵の生物学者フランシスコ・J・アヤラ (Francisco J. Ayala, 1934) は、「目的論」の意味は最終状態への方向付けを示す過程と見ることが可能であって、自然選択もまた目的に向けられた機関を生産し保持するという意味で目的論的と言える、としている²⁶。こうした視点を持ち、自由意志を用いて千年王国の発展に協力していく姿勢は、進化の事実を認めつつ未来を志向する信仰を可能にするのではないだろうか。

これらのことを考え合わせるならば、プラグマティックな宗教観は、キリスト教の枠内でも十分に可能であるように思われる。

VI. おわりに

プラグマティズムの立場からは、まず信念の固め方として「科学の方法」つまり、事実をもとに信念を検証していく態度が要求される。進化については、状況証拠からこれを事実と認めることは必要であろう。キリスト教の立場からは、進化が事実であり、なお神に存在意義が期待できる世界解釈を探していくほかない。進化の意味を神との関係の中で理解する新しい認識を仮説として提唱し、能動的に確かめていくことが求められるだろう。

そのひとつの案として、人間の自由意志をベースに宗教的世界を考えていくことができる。そこで提示されるのは「新しさ」をもたらす「創造愛的な」神である。これはいわば

「創造」概念のプラグマティックな解釈である。

進化論と宗教とを共存させる試みは様々に考えられているが、自由意志を中心軸とする宗教観は、進化論を消極的に受容するのではなく、進化論と宗教とを積極的かつ効果的に結びつけるところに利点があると言える。先に見たように、キリスト教神学においてもこうした方向性を持つモチーフは散見されるため、これらをうまく総合することができれば、実際のな信仰としても成立しうるのではないだろうか。

古典的プラグマティストの見解がそのまま現代に通用するかどうかは検討が必要であるが、少なくとも、プラグマティズムの思考法を用いて対立の調停法を立案し吟味していくことは、一定の意義を持つと言えるだろう。

注

1. Charles Hodge, *What is Darwinism?*, Scribner, Armstrong & Co., 1874, p.173.
2. A・ハンター・デュプリ 「ダーウィン時代のキリスト教と科学者共同体」、『神と自然』、渡辺正雄 監訳、みすず書房、1994年、401～402頁参照。
3. 1925年、聖書の天地創造説に反する理論を公立学校で教えるはならないというテネシー州法に反して進化論を教えたとして、生物教師スコープス (J. T. Scopes) が訴えられ、裁判の結果有罪とされた。この裁判は当初より宗教と科学の代理戦争の様相を呈しており、センセーショナルに報道された。
4. グールドが提唱した「重複することなき教導権 (non-overlapping magisteria)」という概念。科学と宗教が互いの領域に干渉すべきでないことを主張している。
5. バルトは、神を理解することと世界を理解することは本質的に異なる次元のものであり、方法も用語もまったく異なると考えた。ブルトマンは客観的な世界認識と実存的な神認識との対比において、両者をはっきり区分した。
6. 伊藤邦武「アメリカン・プラグマティズム I」、『哲学の歴史 8』、伊藤邦武 責任編集、中央公論新社、2007年、468～469頁、八杉龍一『進化論の歴史』、岩波新書、1969年、176～178頁を参照。
7. 三者とも宗教と科学の関係を調停しようとしているが、デューイに関してはその宗教観が自然主義的であり、本稿に相応しい論点は見出せなかった。
8. Peirce, "How to Make Our Ideas Clear," *Popular Science Monthly* 12, pp.286-302, 1878.
9. Peirce, "The Fixation of Belief," *Popular Science Monthly* 12, pp. 1-15, 1877.
10. 「固執の方法」は、懐疑の焦燥感から救われようとして自ら正しいと決めてかかる個人的・主観的な方法、「権威の方法」は、政府や教会などの超個人的な組織がその絶対的権力で一定の教説を信じさせる方法、「先天的方法」は、「理性にかなう」ように信念を構成する方法、「科学の方法」は、客観的条件に基づき各人の究極の結論が一致するように試みる方法である (崎山勝啓「パースの科学観と宗教観」、『立正大

学文学部論叢』第21号、111～122頁、1965年、114～115頁より)。

11. James, *The Will to Believe* (1897) : *Writings 1878-1899*, The Library of America, 1992, p.527.
12. James, *Pragmatism* (1907) : *Writings 1902-1910*, The Library of America, 1988, pp.536-537.
13. *Ibid.*
14. 浅輪幸夫「パースの哲学的進化論についての一考察」、『哲学会誌』第5号、81～109頁、学習院大学、1980年、88～91頁を参照。
15. 同論文、101～103頁参照。
16. *The Collected Papers of Charles Sanders Peirce, Vol. VI*, Harvard University Press, 1931, p.157.
17. James, *Pragmatism*, p.538.
18. *Ibid.*, p.539.
19. 偶然性と自由意志との間にはまだ距離があるが、この点についての議論は本稿では省略する。自由意志についてのジェイムズの見解については、拙稿「ウィリアム・ジェイムズの自由意志論—科学的であるとはどういうことか」、『宗教と倫理』第19号、69～84頁、2019年を参照されたい。
20. James, *Pragmatism*, pp. 538-539.
21. 木ノ脇悦郎「『自由意志論』の動機—オリゲネス、アウグスティヌスとエラスムス」、『神学研究』第38号、197～228頁、関西学院大学、1991年を参照。
22. 自由意志をめぐる神学論争は事実上、自由の範囲をどこまでと見るかという問題である。アウグスティヌスやルターは意志にほぼ最小限の働きしか認めていないが、エラスムスは比較的広めの範囲を取る。歴史上、極端に自由意志を強調する立場は異端とされてきたが、現在のカトリック教会では、自由な意志に基づいて信仰することを重視する傾向が見られる。
23. 芦名定道「科学技術の神学にむけて—現代キリスト教思想の文脈より」、『宗教研究』第87巻第2号、279～301頁、日本宗教学会、2013年、41～42頁を参照。
24. 18世紀にエドワーズが信仰復興運動を千年王国の兆しと捉え、アメリカの地を千年王国実現の場と見たことにより、米国では後千年王国説が広く普及することになった。ただし、20世紀以降の宗教保守派には前千年王国説を採用するものが増加している(森孝一「〈アメリカの夢〉の行方」、『基督教研究』第52巻第2号、183～212頁、基督教研究会、1991年、36～37頁、大宮有博『アメリカのキリスト教がわかる—ピューリタンからブッシュまで』、キリスト新聞社、2006年、183～184頁などを参照)。
25. カトリック教会は、「千年」を象徴的に理解し時間的な枠を想定しない「無千年王国説」の立場と見られている。ただこの場合、現代は千年王国のうちにあるとみなされ、キリストの再臨は後となるため、歴史的な漸進的發展が肯定される点は後千年

王国説と同様である。

- ²⁶ 芦名定道『自然神学再考』、晃洋書房、2007年、213～215頁参照。